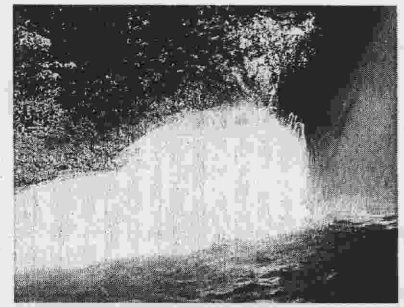
文化

サルトル 今も新鮮

戦争から少年のいじめまで
変わらぬ社会状況



Between the Sea and the Mountain – KUMANO 2005年

鈴木理策写真展「海と山のあいだ」（東京・銀座・ギャラリー小柳、29日まで、©Risaku Suzuki/Courtesy of Gallery Koyanagi）

今年はフランスの作家で思想家のジャン＝ポール・サルトルの生誕百年にあたる。パリで再評価の機運が高まり、日本でも出版やシンポジウムが相次ぐ。戦後の世界に大きな影響を与えながら没後に省みられることが少なかったサルトルが今ふたたび復活したのか。いまの状況と重ねて追ってみる。

没後関心衰える

パリでは国立図書館で三月から大がかりな「サルトル展」が開催中だ。誕生日の六月二十一日に市庁舎で式典が催され、国際シンポジウムも開かれた。七月下旬にはノルマンディー地方でも十日間にわたる大規模なシンポジウムが予定されている。また「ハペラシオン」が七十二ページの別冊を出すなど週刊誌や日刊紙がこぞって特集を組み、書店ではサルトル関連の新刊でにぎわっている。

サルトルが死去したのは一九八〇年四月。葬儀には五万人のパリ市民が墓地まで歩いて植民地政策やベトナム戦争を批判した行動する知識人の死を悼んだ。サルトルは日本にも強い影響を及ぼし、大江健三郎、江藤淳、大島渚、唐十郎などに深い影響を与えた。六六年の来日時には熱狂的な歓迎の嵐が巻き起こった。

しかし、八〇年代以降は忘れられた存在だったといってよいだろう。例えば講談社の「現代思想の冒険者たち」（全三十一巻）ではフーコーやデリダなどのポストモダンの思想家やハイデガーが入っているのにサルトルは抜け落ちている。六八年に三万部も出ていた『嘔吐』はいま年に二千部も出ない。

七〇年代初めまでのブームと八〇年代以降の無関心。この極端な落差こそが「流行」を追うだけの日本の思想受容のかたちを象徴している。

評価巡り論争

サルトルに詳しい白百合女子大教授の澤田直氏（46）はこう語る。「『嘔吐』の主人公はいまのニートの先駆け。戯曲『アルトナの幽閉者』も引きこもりを扱う。サルトルの不人気は読まず嫌いからだ。フランスでは没後二十年の二〇〇〇年ころから評価の機運が高まり、サルトルに批判的だった人までが一斉に本を出した」

その口火となったのが日本でも翻訳されて六月末に出たベルナール＝アンリ・レヴィ（56）の『サルトルの世紀』（藤原書店）。翻訳で九百十ページの大著で、サルトルを現代のスピノザにしてスタンダールと礼賛、一般のイメージとは違ったサルトル像を示し、原著は二十万部のベストセラーに。

この本はヘーゲルやニーチェからフーコーまで、フロ－ベール、ジイドからバタイユまでの哲学と文学の流れの中で、サルトルを魅力的に描いている。さらに「二人のサルトル」という見方を示し、『嘔吐』や『存在と無』を書いたニーチェ的でアンチ・ヒューマニズムの戦前の「孤独なサルトル」を評価し、『弁証法的理性批判』の著者でマルクス主義に同調した戦後の「行動するサルトル」を切り捨てた。

この本は物議を醸した。日本では浅田彰氏（48）がいち早く好意的に紹介したが、五月に岩波新書の『サルトル』を出した仏文者の海老坂武氏（70）はこう反発する。「読んでいて腹が立ってきた。（ほめ殺し期サルトルだけを評価するレヴィ）だ」。海老坂氏は初期サルトルだけを評価するレヴィには批判的で「実存主義はヒューマニズムである」と規定し、人間とは何かを問い続けたサルトルを擁護する。

日本でも学会

日本では小人数の研究者たちが二〇〇一年に日本サルトル学会を結成している。学会には公刊され、精力的に研究を進めている。遺稿をどう読むかに関心を注ぐ。その成果は最近、澤田直氏の『呼びかけ（の）経験』（人文書院）、札幌国際大教授の水野浩二氏（52）の『サルトルの倫理思想』（法政大学出版局）、近畿大教授の清眞人氏（56）の『実存と暴力』（御茶の水書房）などの力作となった。また十一月には東京の青山学院大学でフランスの研究者を招いてシンポジウムを開く。

水野氏が語る。「大学紛争が下火となってからサルトルを読み始めた。『倫理学ノート』や『真理と実存』などの膨大な遺稿をどう読むかに関心を注ぐ。その成果は最近、『倫理学ノート』（法政大学出版局）、『真理と実存』（岩波書店）などとして出版された。戦後六十年。戦争、暴力、疎外、搾取、人種差別、発展途上国問題など、サルトルが取り組んだ問題は消えていない。

澤田氏はこう語る。「戦争が突然起こったとすわけではないが、実は自分の問題。戦争がなくならないために自分は一体、何をしたかが問われる。関係ないといっても、誰もが状況に巻き込まれているというのがサルトルの思想。何が起こるかわからない現在、サルトルを等身大の隣人として見て一緒に考えてゆくと刺激になる」。サルトルは今なお新しさを秘めているといえそうだ。

（編集委員　沖田臨治）

『存在と無』のあと、サルトルが中断した倫理の問題を遺稿をもとに追究していきたい」

清氏はこう話す。「イラク戦争から少年のいじめまで、互いに理解しあおうとする人間関係の相互性が欠けている。サルトルは相手の自由に呼びかけ、他者性について考え抜いた。そこが新鮮に思える」

戦後六十年。戦争、暴力、疎外、搾取、人種差別、発展途上国問題など、サルトルが取り組んだ問題は消えていない。

澤田氏はこう語る。「戦争が突然起こったとすわけではないが、実は自分の問題。戦争がなくならないために自分は一体、何をしたかが問われる。関係ないといっても、誰もが状況に巻き込まれているというのがサルトルの思想。何が起こるかわからない現在、サルトルを等身大の隣人として見て一緒に考えてゆくと刺激になる」。サルトルは今なお新しさを秘めているといえそうだ。

（編集委員　沖田臨治）

生誕100年、再評価進む

実存主義、行動する知識人

ジャン＝ポール・サルトル（1905—80）
パリ生まれ。高等師範学校でボーヴォワールと知り合い、生涯にわたる同志的な愛情を結ぶ。小説『嘔吐』（38年）と哲学書『存在と無』（43年）で戦後の若者たちの絶大な支持を得る。人間のありのままの姿をとらえ「実存は本質に先立つ」という実存主義の考え方を示した。アンガージュマン（社会参加）を提唱し、行動する知識人として活躍した。64年にノーベル文学賞を辞退している。

真談議

交遊抄

斎藤茂樹さんとも二十年近くになるだろう。斎藤さんは福島県奥会津の三島町の町長であるが、町長はたまたまのこと、お会いしたのは当時は親長お助役だった。情報収集のために役場に立取り組んできた「村おこし」や「ふるさと運動」のこと、やがて故郷論へと話は尽きなかった。

これが縁で、数年に一度は三島町で私の写真展が催されるようになった。一昨年に伊奈信男賞をいただいた「千の顔、千の国—エチオピア」の写真展も、近い開催を勧められている。

撮影で訪れたことが機縁になって、親交が始まることは多い。

斎藤さんとは二十年近くになるだろう。斎藤さんは福島県奥会津の三島町の町長であるが、町長はたまたまのこと、お会いしたのは当時は親長お助役だった。情報収集のために役場に立

愛の流刑地 (251)

渡辺　淳一
小松　久子 画

梅雨　十七

突然、レコーダーからの音が途切れる。いままで、冬香の秘所に接吻をしていたのが、果てたのを機に体位を変えているようである。

実際は菊治自身が動いているのに、耳で聴いていると、自分とは別の、もう一人の男がしているように思えるところが、おかしい。

その男はやがて体位を替え、冬香になにか話しかけているようである。

「よかったな！」とたしかめるような声に続いて、「だめじゃない！」と文句をいっているのは、果てるときに、激しく暴れたからか。

ともかく、一度言だけでいかされて、乱れた冬香に、男がさらにきいている。

「欲しいの？」

それに冬香が素直に「はい」と答える。

もはや女は、男にされるがままに、逆らう気はなさそうである。

そのまま短い沈黙があってから、突然、「あっ…」と、慌てふためいたような声をあげる。いまようやく、こらえていた男のものが、冬香の全身を貫いたのか。

「だめえ…」というのは、もはや逃げきれないと覚ったあきらめの声なのか。